
ISじゃなくね？

元・配達人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISじゃなくね？

【Nコード】

N0213Y

【作者名】

元・配達人

【あらすじ】

またまたやってまいりました。

主人公は鬼島 政成。

今度の世界は^{インフィニット・ストラトス}IS世界です。

例によってかなりキャラ崩壊などかなり無茶な感じになると思われますので注意して下さい。

それが無理という方は戻るをした方がよろしいかと思われるます。

プロローグだと思う！（前書き）

前書き

他の話がアレなのにまたもや増やしてしまいました・・・。

大体は一度やりました番外編と似たような流れになると思われます

それではかなり強めのクスリを持ってどうぞ。

プロローグだと思う！

ほう、デケエなあ。

流石は世界に名高い学園ってだけはある。

俺が通う高校たあ大違いだなあ・・・。

つと、あつども、知っている人は、こんにちは、知らない人は・・・
覚えてね？

マサさんこと鬼島 政成です。

本日から始まる楽しい楽しい高校生活

それを思い学校に向かう道すがら・・・。

「政成、乗れ」

「えっ？ 何？ 送ってくれんの？ 別に歩いて行けるんだけど？」

「いいから乗れ」

と、言った感じで車に乗せられて連れて来られた場所。

それが・・・IS学園。

ISつつつとは・イン・・・イン・・・。

インなんちゃらかんちゃらつつつの略で、高性能パワードスーツ？

という物、ようするにアレな？

仮面バッテリーが着用するスーツ的な？

アレの機械バージョンみたいな感じ？

多分そんな感じ。

まっ俺も正直よくわからんで、そんな感じのアレでよろしくお願ひします。

ホントあんま深く掘り下げられたらアレだから？

わかるだろそついうトコ？

ってこの件、長エなオイ。

「・・・？ さっきからオマエは何をしてるんだ？ 正直不気味だぞ」

失礼なやつचना。

気持ちはわからんでもねえーけど。

まっいいさね。

とりあえずは・・・。

「千冬、なして俺はココ（IS学園）に連れて来られたよ？ 今日、俺入学式なんスけど？」

入学式からサボりつてオマエ、スタート大事だよ？

そついうトコで楽しい高校生活が始まるかどうかが決まると言っ

ても過言じゃねえーんだぞ？」

「ぶつくさ言うな、手続きは既に済ましてある」

いや俺が聞いてんなあそういうトコじゃなくてすな。

あつ一応は俺をココに連れて来た人物。

織斑 千冬

俺が『コッチ』に来て以来世話になってる人な。

あつそうそうちなみに俺、異世界人ツス。

例によって

またかよ！！ まただよ！？

ってヤツツス。

しかも今回は10歳前後くれえまで若返るつつつオマケ付き。

それからなんやかんやで高校生になるまで成長しやした。

って、まあ今はそのことは一旦そおーいして。

千冬が言った部分で非常に気になるポイントがある。

「手続きって何さね？」

「編入の手続きだ」

編入となっ！？

「誰が？」

「鬼島 政成」

「ほう、鬼島 政成・・・同姓同名だな」

「オマエのコトだオマエの」

ですよ。

なんとなく、そんな気はしてたけども。

つか・・・。

「なしてよ？ ココ、IS学園だよな？ 一夏はIS起動できつからわかつけどISがうんともすんともいわんヤツが入るトコじゃなくね？」

一夏ってなあ千冬の弟な？

俺と同じ年。

俺、年齢リターンしてるけども、そこは気にせずに。

一応、今は15ってコトになってから。

あつ後ISってなあ何故か女性にしか起動が出来んらしい。

では一夏は女なのかつたらそうじゃなく

さつき弟と言ったように男です。

故に世界で唯一ISを起動できる男としてニュースにもなったりする。」

で一夏君はそういうこともありIS学園にズドンと相成ったワケだが、しかし何故に俺まで？

「あのな政成、ISを生身で圧倒するようなのを野放しには出来んだろ？」

「ああゝなるほろ、言わんとしてるこちゃわからんでもねえーけど、IS使った授業ン時とかマサさんどうしろって言っなの？ 体育座りで見学してろってのか？」

そりゃあんまりだ・・・。

切なさが溢れ出すぞ？

目から。

「別に体育座りじゃなくていい、胡座でもかいてあけ、後、私のコトはココでは織斑先生と呼べ」

「おけ、千冬はいじゃお言葉に甘えて、つか寧ろ寝そべる勢いで」

「流石に寝そべるのはダメだ、それと織斑先生と呼べと言っただろ」

「前半は了承、後半は天地。闘の構え!!」

断固拒否!!

全ての攻撃を跳ね返すぜっ!!

「クッ・・・なんでそう無駄な方向に強情なんだオマエは・・・」

「よせやい照れらあ」

「誉めてない、呆れてるんだ」

残念です。

（全く、本当だったら私だってココには通わせたくないんだぞ・・・

本来通う高校は男子校だったから安心してたというのに

一夏以外女性ばかりだぞココは

むやみやたらにフラグを立てられては・・・クツ・・・)

なんか千冬さんブツブツ言い出したな・・・。

きつと色々とあんだろう、と温めの視線を送つといた。

そんな感じでコチャコチャありつつ、なんやかんやで教室前。

1年1組と書いとります。

今日からココが我がクラスってか。

教室ン中ではメガネ掛けた先生が何やらお話中。

多分、俺ンことを説明してんだろうねえ。

「あん人が担任先生？」

「副担任の山田先生だ、このクラスの担任は私だ」

ほう、山田先生な。

つかアレ？

「普通こういうのってさ、担任が説明して副担が俺を引っ張ってくるモンなんじゃねえの？」

「オマエは普通じゃないだろ？ それともなにか？ 私ではなく山田先生に連れて来てもらいたかったのか？」

なしてそげなジト目？

「いにや、気心しれてる方が良いわな、知らん人だと氣いつかわ」

「フツそうか、というか政成は初対面だろうがお偉方だろうが氣を
つかわんだろ？」

ええ全く人見知りとかしないから。

基本ガンガン行こうぜっ！！

だから。

っと、およっ？

山田先生コッチ見てるな？

そろそろ入れ的な合図か？

とりあえず軽くイエーイとピースしとくか？

『ビクッ、サッ！！』

ふむ・・・。

「涙目で目を逸らされたワケだが」

「目付きが悪い上にガラも悪いからな政成は、山田先生は少し気が

弱い所があるからな」

つまり……。

「ビビられてると？」

「そういうことだ」

チクソウ……千冬だって目付き悪いクセに……。

「何か言ったか？」

まあ、怖い

めっさ睨まれとるし。

「千冬だって目付き悪いクセに」

それでもハッキリ言っけどねっ！！

「クツ……ハッキリと少しは気をつかえ」

「正直者で通ってるモンで」

「その時点で嘘だろうに」

まあよ。

そりゃ生きてりゃ嘘の二つや二つ吐きますよい。

つとイカンイカン。

「俺そろそろ入った方がよくね？ 山田Ｔ（ティーチャーの略）め
つさオロオロしながらコツチ見とるし？」

俺とは目を合わんようにしてるけど。

「オマエが余計なコトを言い出すからだろ？」

いやあついつい。

「えと、それじゃあ鬼島君、入って来て下さい」

おっ 完全なる合図だな。

「むっ、それじゃ政成、入れ、私は後から入るからな、いいか余計なコトはするなよ?」

「御意!!」

そこまで言われたなればもうアレだな。

『ガラッ!!』

教室の扉を開け

「トウッ!!」

『ダンッ!!』

跳躍!!

『クルクルクルッ!!』

そして三回宙！！

『スタツ！！』

黒板の前に着地！！

『カッカカ！！』

そして黒板に名前を刻む！！

『分数無用 鬼島 政成！！』

「どうもなんやかんやでこの学園にネジ込まれた
鬼島 政成です
好きな言葉は王手飛車取り！！
嫌いな言葉は因数分解！！

呼ぶ時はマサかマサナリでヨロシクどうぞ！！」

『ペコリ』

ビシッと自己紹介。

うむ完璧。

「「「ポカーン……」」」

ぬっ、リアクションがねえーッス。

完璧な登場だと思ったんだが……。

「あ、あの、えと、き、鬼島君、その、き、教室で宙返りは危ないので、その……」

「スンマセン、ついこう振られたモンで」

さっきの千冬のは完全に振りだったたからな。

あそこまで言われてら何かしらせにやイカンだろ。

つか山田、そんなビクビクせんでも。

まっその内に慣れると……いいなあと思います。

「はあ、余計なコトはするなと言っただろ」

むっ、千冬も教室に入って来ましたな。

「振ったなあ千冬だろうに？」

「振りではない、というか織斑先生と」

「天地。闘の構え！！」

やはり断固拒否です。

百歩譲って千冬丁だな。

まっ千冬で通すけど。

「あ、あの・・・」

っとイカンイカン山田丁またもや涙目やがな。

「え、えと、私は副担任の、や、山田 真耶です」

このタイミングで自己紹介か。

じゃコレからは山田丁じゃなくて真耶丁ですな。

「どもども、さっきも言いましたけど鬼島 政成ッス、なんか
んやでこのクラスの世話になります、ヨロシクどうぞ」

俺も再び自己紹介。

「あ、はい、よろしくお願いします」

おっ？

チクツとは慣れたか？

未だに目は逸らされっけど。

そんな感じでコチャついてる間にクラスメイトな方々

「お、男ー！ー！？」

「オリムーに続いて二人目！！」

「なんで織斑君と制服が違うの？」

ようやくリアクション。

しかし登場シーンに関してのリアクションが少し欲しいところです。

って、およ？

あそこに見えるは一夏君やん？

ほけ、っとなつとるけど。
それに・・・ありやあ箒か？

そついや箒もIS学園に通うつつつてたな束が。
つか大分ザワツてんな・・・。

一夏ン時もこんな感じだったんかねえ。

『バンッ！！』

「静かにしろッ！！」

『シーン・・・』

ほう・・・。

「やりますなあ千冬、今のは先生ぽかった」

ビシッと静かにさせたからな。

「ぽいじゃない、れっきとした教師だ、とにかく座れ、クラスの者もコイツへの質問は休み時間の間にでもしろ」

「あいあい、つか席は〜」

「あ、鬼島君の席は、あそこの空いてる席に」

「ういッス」

つつわけでスッタラスッタラ席にGO。

席に向かう途中で一夏と目が合ったんでポンと肩を叩いて。

「後でつつつコトで」

「あ、ああ・・・」

うむ。

微妙に箒もコツチ見てたな？

箒にも同席してもらうかねえ。

っと席に到着。

「よっ！！ お隣さんヨロシクな？」

席の座りがてら、お隣さんにアイサツ。

「また男の方？ まあいいですわ
私の隣の席に座れるなんて運が良いですわね」

「そうなん？」

はて・・・もしかや有名人とかなんか？

「むっ、なんですの、その誰？ といったお顔は！！
まさか私のコトを知らないと？」

やはり有名人なのやもしれん。

けども残念ながら。

「知らん、つか有名人なん？ もしくは会ったことがあるとか？」

会ったことがあるってんだったら覚えてる可能性もなきにしもあ
らずなんだが・・・。

ふむ・・・。

ジッと顔を確認。

金髪に青いヘアバン・・・ハッ！！

「思い出した、隣に住んでた佐藤 権三郎さん！！」

「誰ですのっ！！　というか、それは男性の名前ですわよっ！！それと私の名前はセシリア・オルコットですわ！！」

「ナイスツツコミ！！」

グツとサムズ。

ツツコミと同時に自己紹介まで済ますとは、中々の猛者と見える。

あつちなみに佐藤　権三郎さんは別に隣住んではないッス。

つかそんな知り合いはいないッス。

「そこっ！！　うるさいぞっ！！」

『ビュッ！！』

ぬっ？　チョークが飛んで来た。

『パシッ、パシッ！！』

左の人差し指と中指で俺の方に飛んで来たのを

右手でセシリアの方に飛んで来たのをガツチリキャッチ。

一応は俺が原因っぽいしな。

「ちっ、素直に当たれ、それと騒ぐな」

「スンマセン」

「す、すいませんでした」

流石にチクツと悪いと思ったんで素直に謝ります。

チヨークには当たってはやらんけど。

「あ、あなたのせいですわよ」

「だからチヨークキャッチしたろ？」

「怒られてしまったことに変わりありませんわっ！！」

「そこはスマン、っと静かにせんならチヨーク飛んでくんぜえ？
セシリア」

「いきなりファーストネーム!!」

『ビュッ!!』

あっ飛んで来た。

『パシッ!!』

またもやキャッチ。

『バシンッ!!』

「ッ~~~~!!」

俺の分だけね。

「だ〜から言っただのに」

「ムグッ~~~~」

デコをおさえながら睨むセシリア君

いやさ俺、ちゃんと忠告はしたから。

そこんところは加味していただきたい。

・ ・ ・ ・

そんなこんなで授業へ突入。

未だにセシリア君の視線はキツめです。

まあ慣れたモンだけでも。

つか・・・うん、流石にアレだな

そろそろ言わねえーとアレだわな。

「それでは、ここまで、何か質問はないですか？」

おっ、丁度良いタイミングだな真耶先生。

「はいはい!!」

バツと元気良く手を上げます。

「あ、はい、それじゃあ鬼島君、どこが」

「全部ツス!!　つか何を言ってるかもわからんです!!　つか教科書すら、ないんですけど!!」

「え、えっ?　な、なんで?」

「まさな、ンッン・・・鬼島、どういうことだ?」

いやさ千冬さん、そんなコメカミをピクピクされても。

つか・・・。

「いやね、前の学校のは、あっけどコッチのはまだ貰ってねえーんですわ」

しかも俺が通う予定だったトコ今日が入学式だったから授業なしだったし。

通う予定だった学校の教科書とかも持って来てないで家にあるからね。

つか引っ張って来たんは千冬だろうに、なして忘れてんだつつつの。

「忘れてた、そうだったな、仕方がない今日は隣のオルコットに見せてもらえ、良いなオルコット」

「は、はい、わかりました」

「おけ、いや授業中断させてスンマセンです」

「いえ、こちらこそ、それでは・・・」

全くうつかり千冬め。

っと・・・。

「つつワケで見せて下され」

「全く織斑先生がおっしゃったから仕方ありませんけど、なんで私が・・・先程もあなたのせいで・・・ブツブツ」

めっさ不満そうだな。

「まっそう言わんと 初日くらいは頑張って授業を受けようという
マサさんの心意気を汲んでだね」

「初日以降も頑張りさいっ!!」

「前向きに検討するってコトで」

政治家的返答です。

まっなにわともあれセシリアに教科書を見せてもらいISS学園は
初授業を乗り切るコトに成功したのでありました。

いやホント乗り切ったから

マジで寝てないから。

セシリアストッパー（寝そうになる度にペシペシされる）がなかったらヤバかったけどね！！

ブログだと思う！（後書き）

後書き

ブログでした。

さて大丈夫か書いてる人？

自問自答しつつ次回も頑張っていきたいと思いますので、お暇なれば是非！！

第一話だと思う！（前書き）

前書き

なんやかんやで第一話です。

クスリをしっかりと持ったかを確認してからどうぞ。

第一話だと思う！

休み時間突入。

さあさあお待ちかね質問タイムのお時間だ！！

さあ来い、やれ来い、質問来い！！

「・・・・・・・・」

さあ来い、やれ来い、質問来ーい！！

「・・・・・・・・」

さあ来・・・い、やれ・・・来い、質問・・・。

「来いよ質問とかつ！！」

確かに一夏に続いて二番煎じ感は否めんけども！！
授業開始前は結構盛り上がったじゃん！！
そのテンション保って・・・」

「ちょっと」

ぬっ！？

セシリア俺の魂が伝わったか！！

よしっ 来い 質も・・・。

「うるさいですわ」

・・・。

「チックシヨオオオ！！」

次の授業サボってやるーーーーっ！！」

『ガラッ！！』

教室の扉を開ける。

一旦停止、そしてクルリと反転。

「・・・止めないの？ クラスメイツが授業をサボるピンチだぞ？」

『サッ！！』

い、一斉に目を逸らしおった・・・。

「こんなクラス大っ嫌いだアーーー!!」

『ズダダダッ!!』

・ ・ ・ ・

ただ今俺、屋上にてふて寝中。

「あ、いた!!」

あん？

おやおや・・・。

「すっかりクラスに馴染んでる、織斑さん家の一夏君じゃねえーッスか？」

早速クラスからハブられてる俺に何の用ッスかねえ？」

「うつ、や、やさぐれてる」

ケツ・・・やさぐれもすんだろ。

「あ、よく見れば篠ノ之さん家の箒さんも一緒にすかあ？
お久しぶりですねえ？」

あつ俺みたいなモンは覚えてねえーですよ？
まっ覚える価値もない人物ですけど、ケツ！！」

ケツケツケツ！！

「本当にやさぐれてるな・・・
というか私のことを覚えていたんだな」

覚えてましたよ。

ケツ！！

「マサ機嫌直せって」

「別に機嫌悪くないッスよ
俺なんて大体こんな感じですからねえ、ケツ！！」

「語尾からして機嫌悪いだろ、い、一夏どうにか」

「あ、ああ・・・ほらミ。ミ。やるから、なっ？ 機嫌直せ？ なっ？」

「あざーッス！！」

一夏君の優しさに感動した！！

早速いただいたミ。ミ。飲みます。

ミ。ミ。美味え。

心が豊かになりますよ。

さっきまでのイラつきなんざ即解消ですとも。

「ミ。ミ。好きは変わってないんだな」

「変わらない良さってのがあるんです、っと思っ？ 俺のことマジで覚えてたん？」

「ああ、というか政成のような強烈な人物のことはそうそう忘れられないだろ？」

「さやか？」

「うんうん」

左様らしい、一夏も頷いてっし。

「さっきのクラスのやつらも多分様子見てたんだろ？」

「だろうな、いきなり話しかけるには強烈すぎたし」

ふむ・・・どうやら最初の作戦からミスだったらしい。

反省。

「にしても、マジで久々だわなあ筈、まだやってんのコレ？」

竹刀を構えるジェスチャー！。

実際には竹刀は持ってないけども。

「剣道か？ 続けているぞ」

「この前の全国大会で優勝してたんだぜ？新聞に載ってたし」

全国大会優勝となっ！！

「やるな箒、そんな箒さんにはミ。ミ。を進呈しよう」

「う、うん、ありがとう」

ちよっぴり照れる箒さんです。

「ンッン、しかし一夏の方は続けてなかったようだが・・・？」

照れ顔から一転ジト目で一夏を見る箒さん。

「うつ・・・受験勉強とかで忙しかったし」

確かに一夏、結構夜遅くまで勉強してましたなあ。

俺？ 俺は色々バイトしたり遊んだりしたりしました。

受かった学校は一芸入試つつ珍しい入試の仕方だったからね。

ちなみに披露した芸は声帯模写です。

一発でスパッと合格しました。

まあ結局はその学校は通うコトはなかったんですけども。

まっ、人生そういうこともありますわなあ。

「あ、そ、そういえばマサ、マサもISが反応したんだな？」

話題を変えたな一夏。

筈から発射されるジト目光線に耐えられなかったか。

「・・・一夏だけではなく、まさか政成までとは」

あ、乗るんだ筈。

じゃあ俺も乗っとくか。

「いんにゃ、マサさんIS動かせねえーよ？
つか、うんともすんともだぞ？」

もうピクリとも反応しませんよホント。

「はっ？　じゃ、じゃあ、なんでココに!？」

「千冬の陰謀」

車に乗れ言われて、そのままドンだったからな。

完全に人拐いの手口ですよあんなもん。

まっ菓子につられてとかじゃないけども。

「勝手に人を陰謀者に仕立てあげるな」

「ぬっ！！ 出たな陰謀者」

「ち、千冬姉！！」

「だから陰謀者にするな、それと織斑先生と呼べ」

『バシッ！！』

千冬の出席簿アタック炸裂

「痛ッ！！ ま、マサだって言っていないのに」

一夏に。

「コイツは何度言っても聞かん、そろそろ私も諦めた」

天地。闘の構えだからねっ！！

そうそう攻撃は通しませんとも。

「あゝ、納得、マサ無駄に強情だしな」

「そこら辺も変わっていないんだな」

納得顔の一夏君と箒君です。

って・・・。

「なして千冬がココ（屋上）に？」

「どこかのバカが半泣きで教室を飛び出したと聞いてな？ しかも授業をサボるとほざきながら」

はて？

「そりやはた迷惑なヤツもいたもんだ」

「オマエだオマエ!!」

ですよね。

けどね、コレだけはハッキリと言っておかねばならん。

「泣いてないよ？ アレはアレだから、なんかちょっとアレだったからアレしただけだし」

「確かに泣いてはいなかったな」

うむ流石は箒君、シツカリとわかってくれてるな。

花丸を上げよう。

「目に涙が溜まりまくってたけどな？」

「いやそれはアレだから、フとフランダ。スのワンコの話思い出ただけだから
決してクラスメイツが構ってくれなかったからとかじゃないから」

全く一夏君は勘違いも甚だしい。

「意地でも認めない気だな」

「そういうところ強情さも変わってないな」

変わらない良さがある。

いや認めるとか認めないとか意味がわからんけどねっ！！

「ってなんの話だったっけ？」

「政成がISを起動出来ないのに何故ココに入ったかという話だ」

「あ、そうだったな、マサ、ホントになんでなんだ？」

なんでと言われても・・・。

「千冬の陰謀説が濃厚、いや寧ろ支配的」

コレしか考えられんよな。

「だから人を陰謀者に仕立てるな、理由は朝にも話しただろ」

うん、まあホントは覚えてたけどね。

「え、千冬ね、ンツン、織斑先生、理由って？」

お、一夏ちゃんと言いつけ守ったな

若干危なかったけど。

「そうだな・・・わかりやすく言うならゴリラを放し飼いでは買えないということだ」

「ちよっ千冬さん、朝言ってたのと違うね？」

「ああ、納得」

「確かに」

え、納得すんの？

ユー達それで納得してしまいやがるんですか？

まっいいけどね・・・いやホントはよくねえーけど。

「若干胸にシコリが残るが、まっ、そういうことでマサさんはIS

学園にネジ込まれたつつうワケですよ」

「ま、理由はわかったよ、マサとにかくヨロシクな」

「おうさー！　って改めて言うようなこっちゃねえーような気がするけどな」

「ハハ、確かに」

家でも一緒だしな。

っと・・・。

「篝もな」

「ああ」

うむうむ、ちうと・・・。

「じゃ俺はココで雲の形の考察してるからキミらは教室に」

「ダメだ、大人しく授業を受けろ、まだ初日だぞ?」

「ですよ〜」

しょーんなか、とりあえずは次の授業頑張るとすつかねえ。

つつわけで教室へスツタラスツタラ。

「次の授業って何? やっぱIS関連?」

「次は・・・数学だったか?」

ほう・・・数学とな、そうか数学か・・・。

「じゃ俺、雲の形の考察に戻るから」

サクッと手を上げて自由な地へと向か・・・。

『ガシッ』

「戻るな、大人しく受けろ」

え、ませんでした千冬に襟首ガツチリされてます。

「ほら、行くぞ」

『ズリズリズリ』

そのまま教室までド。ド。されることになりました。

その時に俺がISを起動出来んことは基本は内密の方向で、との忠告を受けました。

軽く反応はするつつつテイでいくんだと。

・
・
・
・

「あら、結局戻ってきましたのね？」

「ういただいまセシリア君、戻って来たつつか引きずられて来たが

正解ですわ」

クソウ、雲の形の考察をしていたかった……。

「またファーストネームでっ!？」

「ま、気にしなさんな」

「それはアナタが言うコトではありませんわ!！」

ですよね、っと……。

「アナタじゃなくてマサかマサナリな？」

「なんで私がアナタを名前で呼ばなければ……」

「ノン、ノン、マサかマサナリな?おけ?」

例によって強引に押し切ります。

「わ、わかりましたわよマサナリさんで良いですわよね」

うむむ優秀なツッコミ使いは必要だからね。

コレからもガシガシ頑張ってもらいたいと思います。

「期待してるぞセシリア君!!」

「何をですのツ!!」

ツッコミです。

つと、数学ティーチャーが来たな。

頑張りますかあゝ初日は・・・。

・ ・ ・ ・

「フツ・・・ISの授業よりもさっぱりわからん」

ただ今、数学の授業中配られたプリントを解いています。

がしかし・・・。

ホント何コレ？

なんで数学にアルファベット持ち込むの？ 何度も言ってるじゃ
ん数字は数字で仲良くやればええやんけ！！

しかもなんだ？

このアルファベットの横についてる眉毛みたいなんは？

アレかやつぱ眉毛か？

眉毛で正解？

最近のアルファベットは眉毛があるのか？

けど、コッチのヤツにはないぞ？

ハッ！！

つまりコレは間違い探しの類いか！！

この眉毛がついてるヤツと眉毛がついてないヤツを分けられ
んだな。

なるほど、なるほど・・・。

ン？ いや待てコレはそこまで単純な問題なのか？

コレはもしや罠かもしれんぞ

フツ・・・危ねえ危ねえ

危うく騙されるところだったぜ。

このマサさんを罠にはめようとするとは中々の手練れよ・・・。

しかし残念だったな！！

簡単には騙されんぜっ！！

答えはコレだっ！！

『仲間外れは良くないと思います』

フツ 完璧。

「はい、時間です、それでは答え合わせをしますので隣の席の人とプリント交換して下さい」

ぬっ？ 結局最初の一問しか解けなんだか。

しかし俺、頑張った。

ホント良くやった。

投げ出さなかったコトこそが大事だからね。

うむうむ・・・。

「じゃセシリア君ヨロシク」

とセシリアとプリントを交換。

ほう、全部埋まっとる。

やるやないかセシリア。

ってアレ？

最初の問題の答え俺と違くね？

いや大丈夫だ自分を信じる

もう完全に違うことになってるけど、きっと合ってる大丈夫……。

「ンッン……えっと、マサナリさん、微分の問題で何をどうしたらこういう答えに行きつきますの？」

「えっ、違うの答え？」

「全然違いますわよ！！
なんで微分の問題の答えが『仲間外れは良くないと思います』
になりますのっ！！」

「引っ掛け問題かと思って？」

まっ引っ掛かんかったけどな。

「なるほどふざけてますのね・・・」

アア！？

ふざけてる・・・だと！！

「ふざけてねえーわ！！」

めっちゃめっちゃ真剣だわ！！

ドタマがパンなるくらいまで必死にやっ たつつうのに、ふざけてるは言い過ぎだろうがッ！！」

あんまりにもあんまりな仕打ちだぞコレ！！

「ちよっ、ちよっと、どうしたんですか？」

ぬっ数学ティーチャー。

「カクシカジカっつわけッス」

軽く事情説明。

「えっと、それじゃあ鬼島君のプリントを見せて下さい」

「ええ、コレですわ」

俺のプリントはセシリアが持ってたんでセシリアがプリントを渡す。

「……………え、えっと……………コレはなんでこのような答えに？」

「ふざけてるからですわ」

「何故にセシリアが答えてんの！？
つかふざけてねえーつつに！！」

「落ち着いて下さい、鬼島君、それでは何故この答えになったのか
教えて下さい」

むっ…………。

「わあったツス、えつと・・・」

と、さっきまで問題を解いていた時んコトを話します。

「つつわけで答えは『仲間外れは良くないと思います』という答えになりもうした」

罨に引っ掛らなかった部分は特に強調して話した。

いやホント自分で言うのもなんだが流石ですわい

何故か説明の最中に

（（あつこの人バカなんだ））

つつクラスメイツ＋数学ティーチャーの心の声が聞こえたような気がするのが引っかかるけど。

「鬼島君・・・頑張りましょうね・・・グスッ」

えっ？　ちょっとなして数学ティーチャー涙目？

「うつ・・・あの・・・ふざけてるなんて言ってしまったのもうしわけありませんでしたわ」

いや、うんセシリア君、わかってくれたのは良いんだが、なしてオマエも涙目？

つか見渡すとクラスメイツ全員が涙目なんすけど？

一夏に筈までも。

つか寧ろ俺も泣きそうなんですけど？

なんだってんだチクソウ・・・。

さっきの休み時間に続いて胸にシコリが残る感じになりながらも数学の時間は終了しました。

・ ・ ・ ・

おっと待ちねい、もうちょい続けい。

数学終了後の休み時間、新たな作戦を用意し質問タイムに備えます。

その新たな作戦とは・・・。

『質問受付中！！ 懇切丁寧に答えていきます、答えます！！』

つつ立て札を設置したのだ。

コレならばクラスメイツの皆さんも我先にとやってくることに請け合いよ！！

「いやマサ、それ多分、逆効果」

「え？ マジで？ 懇切丁寧に書いてんのに？」

「問題はそこではないと思うぞ」

む、一夏だけではなく第まで。

なればどこが・・・ハッ！！

「やっぱり明朝体よりゴシック体にするべきだったか？ いや寧ろポ

ツプ彫？」

うむ見てみりや確かに明朝体は堅めな印象を与えてしまうな。

「問題点はそこではありませんわっ！！　というか、このようなもののいつの間に用意したんですのっ！！」

「お？　セシリア君、最初の質問か？」

「違いますわよっ！！」

違ったらしい、マサさんションボリです。

けどもツツコミとしては流石だと思います。

やはりかなりの猛者だなセシリア。

（どうやらオルコット、政成に目をつけられたようだな）

（みたいだな、とりあえずは頑張れとしか言えないな）

（そうだな、まあその内に慣れるだろ）

って一夏&篤君、何をヒソヒソしてやがんの？

「ちよつ、な、なんなんですよ、その暖かい眼差しは！？」

「いや別に」「

息がバツチリッスねお二方。

「で、そろそろ来てもよくね質問？」

そんな俺の思いがようやくクラスメイツに届いたのか休み時間の最後あたりでちよちよこと質問が。

身長やら好きな食い物やらから始まり

なして千冬のコトを呼び捨てにしてたのかとかに至るまで

シッカリ、キツチリと答えましたよ。

懇切丁寧にだからねっ!!

「嬉しそうですね」

「嬉しいですが、マサさん大満足です!!」

「やっぱりこの方って少し・・・」

セシリアよ、その温い目はやめね。

第一話だと思う！（後書き）

後書き

マイルドなセシリアさんでした。

では次回もまたお暇なれば是非！！

第二話だと思う！（前書き）

前書き

第二話です。

やっぱりアレがそれですのでアレをアレしてどっぞー！

第二話だと思っ！

「コレも伝統行事ってヤツかねえ」

本日分の日当（万券でした）をしまいつつ独り言。

ン？

伝統行事ってなんぞやとな？

うむ、それはアレですな。

はい俺、例によってまたまた臨時用務員になりもつした。

三時限目の休み時間中にトイレに行った帰り際、たまたま用務仕事してたオッサンを見かけ手伝ったらスカウトされたのだ。

当然、承諾しました。

ちなみに用務のオッサンの名前は轡木 十蔵。

俺は十じゅうさんと呼んどります。

まっとにかく運良く仕事をゲット出来たわけだ。

んで早速、昼休みの時間、臨時用務員の初仕事をサクッとこなし日当を手に入れたワケです。

いやホント運が良かったねホント！！

なんか毎度用務員的なコトしてる気がせんこともないけど。

つか中学ン時もやってたりしてたけど。

いやゝ、手に職はつけとくもんだわなあ。

ちなみにコッチでの小学時代は近所のリサイクルショップとかで売られたリサイクル品を修理したりしてもしとりました。

あ、毎度ってなんだ毎度って！！

つつアレは無しの方向でお願いします。

気になっても、いやいややっぱ気のせいだったわ、と流して下さい

れ！！

マサさんからのお願い。

とコレまた恒例のアレをし終わっただんで昼メシを・・・。

「つつても今日、弁当ねえーんだよなあ」

原因は千冬です。

ちなみに千冬と書いてる拉致加害者と読みたい今日の俺。

『いい加減、そこから離れろッ！！』

脳内にて千冬さんのツツコミをいただいた。

折角、陰謀者からチクツと捻ったつうのに、なんて我が儘な。

『オマエにだけは言われたくないッ！！』

ですよ〜。

自覚はあるんです。

っと、イカンイカン今はンことよりメシだメシ！！

やっぱりココは学食が妥当かねえ。

よし、そうと決まったら学食に行くとするか。

つつわけで学食へ向けて、つか学食探してスツタラスツタラ。

わかんなかったら、そこらの生徒さんやら先生でも取っ捕まえて聞こうと思ったけど。

わりと直ぐに発見しました。

ま、案内板的なのがあったしな。

実に親切です。

探し回ってスツタラスツタラしてる間、結構、生徒さんやらにジロジロされたけど。

パンダ的な意味で。

その辺りの視線には全然慣れてるけどねっ！！

っと、そうこう言ってる間にもメニューを注文。

カツ丼大盛りにセットで着いてくるみそ汁。

「思ったよか空いてんなのあ」

昼メシ時だから混んでるかと思ったんだが結構席に空きがある。

まあ好都合だけでも。

っと、およ？ あそこにいんなあ。

スツタラスツタラとそこに近づき隣に座る。

「よっセシリア、セシリアも学食なのな？」

クラスでも隣の席のセシリアさんでした。

「・・・なんで隣に座りますの？ 他にも空いてる席はありますでしょう？」

「そりゃセシリア見かけたからだな、他のヤツらは面識ねーし」

顔見知り、つか俺的には既にダチを見かけたら隣に座るでしょうよ。

「だったらお一人でお食べになればいいじゃないですか」

「一人でもそそ食っても美味さ半減しちまうべ？」

「そんなことはありませんわ、全く折角、時間をずらして来ましたのに」

時間をずらして・・・ねえ？

「何？ 一人で食いたかったん？」

「ええ、回りが騒がしかつたら優雅にランチも出来ませんわ」

優雅にランチつつわれてもなあ。

「俺あ優雅にランチよか楽しくメシが良いやな、こつやって話ながら食うとメシの味の引き立つてもんだ、友との会話が最高の調味料なんですよい」

どっかで聞いたセリフだけどな。

「友？ 誰と誰がですの？ まさか私とマサナリさんがとてもおつしやるつもりですの？」

「インザクトリー！！」

大正解でございやす、正解者のセシリア君には食後のミ。ミ。が進呈されます」

やったね。

「発音が違いますわ、正しくは……って何が大正解ですの！？
いつ私がアナタと！！」

その手のリアクションは慣れとります。

「今日、俺がセシリアの隣の席に着いた時だな、っとイカンイカン、メシが冷めてまう、いただきますつと!!」

どうせなら温かい内に食わんとな。

特にみそ汁は。

「むぐむぐ、結構美味えな」

「席に着いた時につて、いえ、それより口に食べ物が入っているのに喋るなんてマナー違反ですわよ!!」

ぬっ？ マナー違反とな。

「そついや今日はうつかり家に置いて来たわ」

「マナーは家に置いて来る物ではなく自分自身の胸に置いておくものですわよ!!」

「ナイスツツコミ、ってセシリア食わんの？」

流石は逸材、見事な切り返し。

「食べますわよっ!!」

うむ。

ってセシリア、俺にマナー違反とか言っときながら、大分荒れた
食い方してんなオイ。

マナー違反ですけど、と言おうと思ったが俺が原因な気がせんこと
もなかったんで言わないでおいた。

なんせマサさん紳士だからね。

・
・
・
・

「け、結局、一緒に食事をするような形になってしまいましたわ・
・」

なして肩を落とすセシリアよ。

チクツと切ないぞコラ。

ま、いいさね。

メシも食い終わったし。

「ほい、ミ。ミ。、っと、じゃ俺ア一夏で遊んでくるかねえ、セシリアも行こうぜえい」

楽しげえ一夏イジリ。

「え？ え！？ あ、ちよっお待ちに・・・」

「ほれほれ、ハリー、ハリー」

「だから発音が違いますわー！ー！！」

妙に発音にこだわるなセシリア。

ってそっぴやセシリアって・・・どこの国の出身なんじゃろ？

今さらながら気になったんで聞いてみた。

「イギリスですわ、というかイギリス代表候補生である私のことを知らないなんて無知も良いところですよ!!」

どうやら紳士淑女の国の出らしい。

つか・・・。

「代表作候補生って何さね？」

「そこからですのっ!？」

「うむ、そこからだ」

わからんモンはわからんです。

いやニュアンスでなんとなくはわかるけども。

「モンド・グロツソに出場する国の代表のことですわ、まさかモン

ド・グロツソのことまで知らないなんて言いませんわよね?」

「いや流石にそれは知ってるっつの」

あ、一応はモンド・グロツソってなあISを使ったオリンピックみたいなモンな?

参加国は大体21かそこらだったはず?

多分。

まっようするに代表候補生ってなあそのままの意味で国の代表の候補ってことだわなあ。

ってホントそのままだなオイ。

あ、ちなみに第一回大会の優勝は千冬だったりもします。

第二回はチクツと色々あって逃しちまったけど……。

チツ……またイライラして来た。

あのクソボケ共が・・・。

『ギチイイ!!』

「な、なんですの、そのお顔は、それは少しバカにしたような言い方をしてしまいましたけど」

っとイカン、勘違いしとるし。

どうやら面に出てもうたらしい。

「悪い悪い、チクツと思うところがあってな？ セシリアのせいでは、ねえですよい」

ポンポンと頭を手をおき謝ります。

マサさんだつて悪いと思つたら謝るのだ。

「ちよつ、勝手に頭を撫でないで下さいまし!!」

「撫でとりませんポンポンです、系列的には同じだけど」

「どうでもいいですわっ!!」

そりゃ残念。

ま、ポンポンとの違いはアッチに、そぉーいして。

「代表候補生か、なんか色々と肩が凝りそうだよなあ」

「名誉なことですわ、肩がこるなんてコト言ってられませんわよ、まあ多少は凝りますけど・・・」

あ、やっぱり凝るんだ？

そりゃそうだな。

「候補が取れるように頑張れセシリア、肩が凝らない程度にな？」

「マサナリさんに言われるまでもありませんわ、必ずイギリスの代表になってみせますわよ!!」

いやさ気合い十分なのはいいが。

「肩の力抜けつつうに、さっきも言ったべ？ 肩が凝らん程度につて」

「そうはいきませ・・・」

「はいはい、あんまし氣イ張り過ぎつと疲れんぜ？ つつわけでは、一夏、見つけて一夏で遊ぶぞ」

「ああゝゝもう、人の話を聞かない方ですわね!!」

よく言われますよい。

それから、やいやい言ってるセシリアを引きずりつつも一夏を発見。

第も一緒です。

「あ、マサ終わったのか？」

「おうよ、ついでに学食でメシも食ってきた」

「なるほど、それで・・・か？」

チラッとセシリアを見る篤。

「それでってなんですか？」

「政成に見つかり気付いたらココまで引きずられて来たのだからなと・・・な」

「ええ、まさにその通りですわ」

「ああ、やっぱりな」

やっぱりとはなんぞや一夏よ。

まあいいさね。

あ、ちなみに一夏と篤の二人は臨時用務員になったことは知っています。

昼メシ誘われた時に伝えといたのだ。

「「まあ頑張れ」」

「な、なんなんですよその半分憐れみが混じった視線は!!」

「「いや別に」」

前の休み時間の時に引き続き、息ピッタリだなオイ。

その視線は俺にも間接的に響くんだぞコンナロー。

そんな気持ち乗り越えつつ昼休みの残り時間ダラダラ雑談タイム。

「マサ、また臨時用務員になったのな？ 中学の時もやってたけど」

「ン？ 政成、中学の時もやってたのか？」

あ、そういや筈は中学ン時のこたあ知らんか。

「まあよ、こなすぜえ用務仕事」

直すぜえ色々、まあ壊したりもするけども。

「後、なんか何でも屋みたいなコトもしてたよな？」

ええ実はそんな感じのコトもやってました。

まっ大概是エアコンとか換気扇とかの修理だけだな。

他は引ったくり犯とか捕まえてみたりとか。

「・・・大丈夫ですか？　この方に任せて？」

ってオイ、セシリア君、その疑いたっぷりの言葉と視線はなんだ
つつつの。

「結構マサさん色々こなすよ？　一家に一台、鬼島　政成、一家に
一台、鬼島　政成だぞ？」

結構何度も言ってるけども。

『ブーン、ブーン』

むっ、メールか？

どれ・・・。

『買った！！』

差出人は東でした。

つか、今の会話聞こえたのかアイツは？

やはり、あのウサギイヤーは伊達ではないというコトか。

ま、その疑問は置いといて

『売らねえーつつの』

と返信してきました。

スルーしようか消去しようか迷ったけど一応な。

「人と話をしてる時に携帯電話を使用するのはマナー違反ですわよ」

「そこはスマン」

確かに今は俺が悪いわ。

イジるにしても先に断りをいれるべきだわな。

反省。

「え、アレ？ す、素直ですわね」

「悪いと思ったら謝るつつの」

悪いと思わなかったら謝らんけど。

「どこでそう思っのか分からないけどな、俺もいまだに分からない時あるし」

「フハハハ、マサさんの底の深さをナメるなよ？」

結構深く複雑に出来てるんですよ多分、きっと、メイビー。

「自分で言うコトかそれは？」

「ですわね」

俺は言つのです。

「・・・ホントに良く分からない方ですわ」

「その内、分か・・・ンッン、慣れる」

ちよっ纂さん？ 何故に言い直した？

「だな」

一夏君も同意するなっつに。

まっいいけども、概ね間違いとは言いきれねえーし。

自覚はなきにしもあらずだし、自分でもたまにそう言っし。

「慣れたくありませんわ・・・」

いやセシリアよ、そこは慣れてこう段々と。

そんな俺の願いが青空に吸い込まれつつ昼休みは終了しました。

・ ・ ・ ・

はい三、四と続いて五、六時限目を飛ばし放課後です。

つまりは自由、放課後とは自由という意味があるのだ！！

と自由に浸りたいとこだがSHRN時に

「まさな、ンッン鬼島、この後、職員室に来るように」

と千冬に呼び出しを受けました。

はて？　今日は結構大人しくしてたと思うんだが。

クビを捻りつつも教教室を出ます

出る時に一夏、箒に引きずられてくのが気になったけど、チクソウ面白そうな匂いがあるから着いて行きたかったんだが。

とは言え職員室にGOします。

その道すがら荷物持ってフラフラしてる真耶先生に遭遇。

そついやSHRン時いなかったな。

他ンクラスの授業してんたなかねえ。

にしても・・・。

うゝむ、今にもすっ転びそうだなオイ。

よしゃ。

「ウィース真耶先生、コレ職員室ツスカ？」

近づいてヒョイと荷物を奪います。

「え？ あ、き、鬼島君？」

「ええ鬼島君です、で、コレ職員室？」

「あ、はい、そうです・・・けど」

「じゃ行きまっしょい、丁度、俺も職員室に用があっし」

ま、別ンところでも大丈夫ちゃ大丈夫だけど。

「あ、でも悪いですよ」

「気にしなさんな、持ちっ持たれっですよい」

多分、授業とかで多大に迷惑掛けたらうし。

「で、ですが・・・」

「フツいくら遠慮しようと思物は既に俺の手の内よ、勝手に運搬しまっせ？」

そう言ってスツタラスツタラ歩き出す。

「あ、ま、待って下さい」

慌てて追い掛けて来る真耶先生と共に職員室へと向かいました。

ンで職員室へ到着。

中へと入り荷物を置く

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ、お気になさらず、っと・・・千冬は・・・」

真耶先生に礼を言われつつ気にしなさんなと言ったとき
持ちつ持たれつだからな。

そっから回りを見渡す千冬を探す。

「居ねえーんでやんの?」「」

「えと、織斑先生をお探しですか?」

「ッス、職員室に來い言われたんスわ、呼び出した本人が不在かどうか」

はて?

「でしたら織斑先生が来るまであそこの席で・・・あつ、そうだが、荷物のお礼にお煎餅でも食べますか?」

「食べる食べる」

お言葉に甘えて、真耶先生と煎餅パリポリ。

真耶先生も朝から比べて大分慣れてきたようで。

「やっぱり男の子は力がありますね、重たい荷物もヒョイって持ち上げちゃうですもの」

「腕力にはそこそこ自信ありますからな」

荷物どころか、この学園ごと持ち上げること出来ると思うし。

流石にやらんけど。

「それに背も大きいですし、織斑君よりも大きいですよね？」

「ですな」

一夏が172くらいだったか？

俺は相変わらず179。

クソウ、やっぱり180の壁はデカイ。

「私は身長低く見られちゃうんですよ」

「ン、確かに言われてみりゃそんな感じがしますな」

「ですよね・・・はあ、鬼島君から見てもそうですか、ちなみにいくつだと思います？」

ふむ・・・真耶先生の身長か。

「155とかそんなくらい？」

「あ、スゴい当たりです！！」

「でも、体感的には150ない感じがする」

「あう・・・やっぱり」

あ、イカン落ち込んだ。

けど、なんか妙にちっさく見えるんだよねあ？

なんか知らんけど。

アレから小動物的なオーラが出てるからか？

なんか真耶T小動物っぽいし。

と、こんな感じで千冬が来るまでの間、身長の話とかで盛り上げるくらいには。

ちなみに、そんな時に俺んコトは鬼島君じゃなくてマサかマサナリでヨロシクって言っというた。

ンで、千冬が来たんで千冬ンとこへ。

「すまない待たせたな」

「構わんですわい、別にヒマでもなかったし」

煎餅美味かったし、真耶丁の俺に対するビビリ具合も解消できた・・・と思うし。

「そうか」

そうなんです、っと・・・。

「して千冬さんや？ なして俺は呼ぶ出されんさ？ 今日はやらか

してないぞ?」

「別にそういうコトで呼び出したワケではない、というか明日以降もやらかすな」

「それは確約しかねます」

「堂々と言つな堂々と・・・はあくこのバカだけは」

頭を抱える千冬さんです。

つか勉強が苦手なだけでバカではないつつに。

ま、いいさね、いやホントは良くないけど。

とりあえずは流して。

「で、そういう呼び出しじゃなかったらなして俺は呼び出されたんさ?」

本題へと戻します。

「コレを渡す為だ」

「なんぞコレ？ チャリのカギ？ 俺今日はチャリじゃねえぞ？」

「何故、自転車だと思うんだ、というか今日は私の車で来ただろう」

来たつつか半分拉致みたいなモンだけだな。

ま、そのこたあ散々弄ったんでスルー言わないとして。

「んじゃ何のカギさね？ 家のカギはあつぞ？」

「オマエの部屋のだ今日からはIS学園にある寮に住んでもらう、
大体の荷物は既に運び終わっているが細かいものはヒマな時にでも
取りに行け」

なんと！？

いつの間にやらそんなコトに？

って考えてみりゃ一夏も寮だったってたし俺もそうなるわなあ。

「おけ、了解ッス、って千冬もその寮なん？」

「そうだが、まあ私は頻繁に帰ってはいたがな」

ええ少なくとも週に二回は帰って来てました。

ま、それを含めても一夏が寮暮らしになったら、織斑家にはほぼ俺だけ状態だったからな。

俺がコッチに入らなんだら家主よか居候のが在宅率が高いというわけのわからん状態になるトコだった。

そう思うとコッチに入ってたやもしらんですな。

それに・・・。

「寮暮らしもまた面白そうだしな」

「騒ぎはおこすなよ」

「それも確約しかねます」

やらかさないとは言えないんだぜ！！

「はあ~~~~~」

かなり長めのため息をはかれました。

ちよつとシヨンボリ。

でも寮暮らしは結構楽しみです。

「あ、そうだ、まさな、ンッン、ええ〜い、もう放課後だから政成と呼ぶ政成の部屋は元は物置だったから広さはあるがシャワー等の設備がない」

はい？

「え、ちよつマジで？ 風呂は？ あ、大浴場的なんがあるの？」

「あるにはあるが政成と一夏は使用は出来ん、元は女しかない場所だぞ？ 入浴中に鉢合わせたらコトだからな」

いや、まあ言わんとしてるこちやわかるけども・・・。

「だったら風呂はどうせいと？ あ、自力でリフォームしろと？ おけ、だったらやってやる！！」

半日あれば一軒家とて建設出来るマサさんの力をナメるなよ！！

「止めても無駄だろうから止めないが、今日は程々しておけ、シャワーを使いたいなら私の部屋を使っても構わん」

む・・・確かに今からやりだしたら結構な時間になるやもしれんしな。

今日は軽めにやって本格的な作業は明日に回すとすつか。

「じゃ、時間を見て行きますわ」

「ああ、そうしろ、ではまた後でな」

「うい」

多分使用後にツマミとか作らされたりマッサージとかやらされたりすっただろうけど、それは千冬が帰って来た時の恒例行事みたいなモンだしな。

ってアレ？

つつこたあ 今日から毎日コース？

それは流石に勘弁ねがいたいんで、前もって。

「毎日はやらんぞ？」

「チツ・・・」

舌打ちすんなつつつの！！

第二話だと思う！（後書き）

後書き

引き続きセシリアさんマイルドモードな第二話でした。

さて次回も頑張っていきたいと思いますので、また是非に！！

第三話だと思う！（前書き）

前書き

三話目です。

ますますキャラ崩れが激しくなっています

それでも大丈夫という方はクスリを沢山持ってどうぞ。

第三話だと思う！

「まあなんというコトでしょう！！」

劇的なビフォーアフターのなセリフ。

思ったよか進んだ部屋の改装具合についてまいりました。

まあ思ったよか進んだだけで終わったわけじゃないんだけどもな。

明日は風呂やらキッチンやらを設置しよう。

最終的には壁をブチ抜いてベランダ的なのも造ろつかと画策中。

他の寮生の部屋にはあるみたいだけど

ま、俺ん部屋は元が物置だったらしいからな

部屋の位置も他の寮生とは微妙に離れてるし。

その分広いからいいんだけどもね！！

結構沢山のヤツらを招けるぜっ！！

その内、一夏とか筈、後セシリアでも呼んで遊ぶかねえ？

あ、千冬もな。

って、そうだったわ千冬で思い出した。

そついや今日は千冬ン、トコのシャワーを借りるんだったわ。

ふむ・・・時間もそろそろ良い時間だし行くとすつかねえ。

つつわけでスッタラスッタラ千冬の部屋へ。

あ、千冬の部屋の場所は教えてもらったから知つとりますよ。

と、そつこう言ってる間にも部屋に到着。

『コンコン』

ちゃんとノックはしますとも。

「ン？ 政成か？」

「うい、シャワー借りに来たツス」

「わかった入っていいぞ」

うむ、許可が出たな。

では……。

「……………」

部屋に入った瞬間に思うコト……。

「ン、どうした政成？」

どうしたじゃねえーだろ千冬。

「あゝゝ千冬君や、コレはどういうこと？」

「何がだ？」

何がだ・・・だと？

何がだ・・・ねえ・・・。

ハハッ・・・。

「なんだこの部屋の散らかり具合はっ！！
毎日とは言わんが掃除と片付けはちゃんとやれつつってんだらう
がっ！！」

ええ、もう部屋がね散れてる散れてる。

服は脱ぎっぱだわ空き缶はところかしこに転がってるわ菓子の袋
もちらほらと・・・。

『スッ』

「・・・今日は偶々だ」

「思いつき目エ逸らされて言っても説得力無いわっ！！
つか一日ではこうならんわっ！！」

少なくとも三日か四日くらいはかかるはず。

「そんなことはない、一日も有れば事足りる」

「事足りるじゃありません！！

シャワーは後じゃ！！

先ずは掃除っ！！」

「やってくれるのか？」

「オマエもやんの！！」

何、全部俺に押し付けようとしてくれてんのコイツは？

「・・・チッ」

ってオイ。

舌打ちすんなつつうにっ！！

千冬め、ぱつと見はシツカリしてるように見えるクセにこついう
トコはマジでダメなお姉ちゃん（一夏の意味で）

略してマダオだからな。

なんかどつかで聞いたけど、そこは気にしない方向で。

まあとにかく千冬はマダオ

「それは本当に止めてくれ」

どつやら声に出てたらしい。

流石に止めれと言われました。

可哀想だからあんまり言うのは控えてやろつ。

まあそれはともかくとして。

「掃除だ掃除!!」

シャワーの前に千冬の部屋の掃除やら片付けやらを慣行。

で、だいたい30分くらいで終了。

千冬ルーム、ピッカピカとまでは行かなくてもかなり綺麗になりました。

「うむうむ、コレからは定期的に」

「やってくれるのか?」

「やらん自分でやれ」

ここに来てまたもや人任せにしようとする千冬です。

いやさ手伝いくらいは構わんけどもね。

まあそれはそれとして。

「つつわけで掃除も終わったんでシャワー借りるべ」

「む、そう言えばそういう目的だったな」

そついつ目的だったんです。

つつわけで目的を達成する為にシャワーを借りる・・・その前に。

「覗くなよ？」

「・・・当たり前だオマエは私を何だと思ってるんだ？」

「誘拐犯」

「そのコトからいい加減離れろッ!」

いや〜つつい。つつい。

つか覗くなつつた時、軽く目が泳いでやがったのが気にならん
こともないが・・・平泳ぎくらいに。

「まっとにかく覗くなよ？　じゃシャワー借りまゝす」

「ああ、覗きはしない・・・覗きはな・・・」

なんだその微妙に含みを持たせた言い方は？

まあいいさね。

サクッとシャワー浴びて来るとすつかねえ。

ホントなら風呂に浸かりたいトコだけでも。

・ ・ ・

「ふいふサッパリ、けどやっぱり微妙に物足りん」

サクッとシャワーを浴びた後の感想。

やっぱ湯つばに漬からんとアレだよな。

コレは早急に風呂を設置せにゃイカンな。

まあ明日には設置出来るだろうけど。

「む？ もう浴び終わったのか？」

「うい、シャワーごっそさんです、つかシャワーってだいたいこんなもんだべ？ 普通に風呂だったらもそっとかかつけど」

「まあ言われてみればそうだな、じゃあ政成マッサージ頼むぞ」

「おけ」

予想通りやっぱマッサージやらされっみたいだねえ。

まあ都合が良いっちゃ良いわな？

ケツケツケ。

「なんだその顔はまさかマッサージにかこつけて不埒なコトを」

「全然」

「素で応えるなっ！！少しは慌てる！！」

知らんがな？

つかどうせいと？

アレか難しい年頃なのか？

遅れてきた思春期？

「・・・何か非常に失礼なコトを考えてないか？」

「いんにゃ別に、ほれほれマッサージすっから横になれ」

適当にごまかしつつマッサージを開始します。

『グッグッ』

「ん．．．やはり上手いな」

「そこそこな？」

どうかのパーにやらされまくったしジジイにもやらされたしな。

千冬にも結構やってっけど。

「よっ！ー！」

『グッ！ー！？』

「ツツツ！ー！？ 政成、今は少し痛いんだが？」

「そりゃそうだ、痛いようにやったんだからよッ！ー！」

『グリッ！ー！ー！』

「な、何！？　グッ！！」

フッ・・・どういうねえ？

「いやな、さっきシャワー浴びた時に気付いたんだけどな、シャワー室に隠しカメラが設置されてたんだよね？」
「なんでだろうね？」

ええ、シャワー室で服を脱ぐ前に一応確認したら案の定ありやがりましたよ。

隠しカメラが。

しかも計三台。

誰が設置したかは言わずもがな。

「し、知らん、私じゃ・・・」

ほうシラを切るとな？

キツチリ認めたらば多少は加減をしてやらんでもないとおもったが・
・。。

「本日は特別サービスのエグゼクティブコースになります、ゆっくり楽しんで・・・ね？」

ニタリ悪役笑い。

「ツツツ!!??」

ま、待てアレはホントに・・・」

「キャンセル不可です!!」

「ツツツ~~~~~~~~!!!!?」

半泣きになるまでエグゼクティブりました。

ものっそいスッキリ。

「ツーー、少しは加減をしろ、この馬鹿力は」

復活した千冬さん軽い恨み言。

「力ではない技術だよ千冬君、馬鹿力は否定はせんけど」

腕力には自信ありだからね。

前回、真耶先生にも言っただけ。

つか・・・。

「加減はしとるし、後、自業自得だっつうちに」

「減るものでもないだろ？」

開き直るなっつうちに、確かに減らないような気がしないでもない
が減ってる気もそこはかなくなるんだから。

っと、そうだった減ってるで思い出した。

「そっぴゃ俺、晩メシ食ってないわ」

流石にチクツと腹減ったッス。

「む？ まだ食べてなかったのか？」

「改装作業に集中してたからな、まあ、まだ終わってないけど」

明日か明後日まで終わらせる。

少なくとも明日には風呂は設置する。

コレ言う二回目か三回目くらいだけど、そんだけ強い意思というコトなのだ。

「ふむ・・・だったら冷蔵庫にある物から何か作っていいぞ？」

私にも作ってもらうが」

「前半には感謝、しかし後半は元から何かしら作らせっ気だったろうにと言っておこう」

「フツ・・・否定はしないな」

なんでハードボイルド風？

いや似合っではいるけども微妙に違くな？

使う場面が？

まあいいさね。

とりあえずは冷蔵庫確認。

「ふむ・・・焼きそば辺りだな、千冬は・・・」

「私は夕飯は食べたから焼きそばは少し重いな」

「量減らせばよくね？」

「そう言われればそうなんだが・・・ふむ」

微妙に悩んでるな。

ふむ・・・だったら

もう一度冷蔵庫に目を通す。

ふむイケるっばいな。

「じゃ杏仁辺りはどうよ？」

「杏仁豆腐か、ふむ、それで手を打つか」

そんな言い草してるクセに微妙に目が輝いとるなオイ。

カワイイけども。

「じゃサクツと作つくつからチクツと待ってるい」

「・・・何故わざわざ頭を撫でに戻ってくる？」

それは撫で王目指してるからね。

カワイイと思ったら撫でますとも、ええ。

と、そんなやり取りがありつつもサクサクッと焼きそばと杏仁を作りテーブルへと並べる。

そしていただきますしてからもっさもっさ食べる。

中々の出来でした。

千冬も杏仁、旨そうに食べとりました。

満足ナリ。

「んじゃ俺あ部屋に戻りますわ」

ぼちぼち、いい時間だし。

「ああ、明日は遅刻しないようにな」

「せんで、マサさん朝強い知ってるべさ?」

だいたい6時とかそんなくらいには起きますよ？

つか起きようと思った時間には起きれます、目覚ましとか使わなくても。

「寝坊という意味での心配はしてない、ただ政成の場面は余計なコトを仕出かして遅刻とかが、あり得るからな」

あ、そう言う意味？

そっちだったらアレだな、うんアレだ。

「確約はしかねます」

「しろ、せめて一週間くらいは大人しくすごせ」

「鋭意努力しますがやはり確約はしかねます、じゃそついうことで
！！」

政治家的なセリフと共にバツと片手を上げて千冬の部屋を後にしました。

「あ……はあ……本当にあのバカだけは……」

なんか千冬がグチってる気がしたがスル！。

で部屋に戻ると。

「あん？ なんじゃあの箱？」

何やら部屋の真ん中に謎の箱を発見。

千冬の部屋に行く前にはあんな無かったんだが……はて？

爆発物的なアレか？

別段恨みを買った覚えは……。

有りまくるな。

星の数とまで言わんがかなりの数買って覚えがある。

まあ俺の恨みの数のこたあ置いといて、とりあえずあの箱がなん

なのか調べてみんとな。

どれどれ・・・。

近づいてみたら箱の上に手紙を発見。

その手紙にはウサギのマーク。

はい、この時点で誰がコレを持って来たのかはわかりました。

犯人は・・・。

「束だッ!!」

『ピンポンピンポーン』

声帯模写の応用で自分で効果音を出してみた。

ちよっぴり切なくなった。

そんな切なさ乗り越えつつ手紙を読んでもみる。

『やつほ、まー君、アナタの束お姉さんだよ』

一瞬ココで破ころうかと思ったが流石に自重。

でもとりあえずは。

「誰がやねん」

とは言った。

『誰がやねん、と思った、まー君!!』

もうちよつと捻ろう、まー君ならもつと出来るよっ!!』

イラッとしたが確かに捻るべきだったやもしれんとも思ったんで
破くのは我慢。

続きを読む。

『まー君、IS学園に入学したんだって？

そんな、まー君に束お姉さんからプレゼント!!

成りきりISセッター!!!

コレは簡単に言つとISっばい着ぐるみなのださ!!

とっても頑丈に出来てるから、ちよつとやそつとじゃ壊れないよ、その分、ちよつと重いけど

でも、まー君なら大丈夫!!

コレを着て頑張れ、まー君!!

東お姉さんより愛を込めたプレゼントでした!!

じゃまたねー、まー君!!」

ふむ・・・。

「ISっばい着ぐるみとな？
それはそれは・・・」

コレである程度のごまかしが効くと。

ぶつちやけごまかさなくてもいいかなあと思つてゐるけども。

けど束の気遣いは素直にありがたい。

メールで。

『IS着ぐるみありがたく使わせてもらっぜ束！！
ただ愛のほうは返品いたします』

と送つといた。

直後。

『残念だけど返品は受け付けてないのさ！！』

との返信。

思ったより悪質だった。

いや着ぐるみは素直にありがたいけどね。

で早速、箱を開けて確認。

出て来たのはそれっぽい黒のスーツケース。

コレの中に入ってるらしい。

更にそのスーツケースを開けて確認・・・しようと思ったけど、使う時でいいかと考えて止めといた。

マサさんは楽しみは後に取っておくタイプです。

好物を後に残しておくように・・・。

はい俺、嘘ついた。

好物とかは食いたいタイミングで食います。

後とか先とか関係ねえーッス。

まあIS着ぐるみの確認は後に回すけどな。

しかし一応は名前だけはつけておこうと思う。

さて・・・なんつつ名前にするべか・・・。

よし単純に『マサナリンガー』にしよう。

なんせ使う俺だから。

あ、最後にSもつけてみよう。

『マサナリンガーS!!』

うむ、カッコイイ・・・か？

いやカッコイイはず!!

多分、きつと、メイビー!!

自分を信じる!!

つか例えカッコイイとは言えんでもわかりやすい方が良いしな、
うん!!

名前考えるのがめんどくさいとかそんなじゃないからホントに
!!

信じれ!!

と恒例のアレをやりつつも本日は就寝です。

・ ・ ・ ・

おっと、もうちょい続け!!

というわけで翌朝。

『ゴキゴキ』

「おはようさん」と

クビを回しながら誰にともなく朝のアイサツ。

さて・・・朝メシを・・・。

ってイカン、キッチンないから作れんがな。

ふむ、朝メシはどうすつか・・・。

確か・・・寮にも食堂があつた・・・か？

あるよな？

多分？

あるような気がする。

うむ、あるある、きつとある。

なかったらなかった時に考えよう。

とりあえず朝メシ問題は解決。

いや全然解決はしてねーけど。

とりあえずは置いといて。

「洗濯だな」

あ、一応洗濯機はありますよ？

この辺りはそこそこ親切です。

じゃ洗濯機回して・・・。

どれ天気のチェックをせにやな。

あつとテレビもあるぞ？

コッチは俺の私物だけど。

荷物にちゃんと含まれておりました。

つとそうこう言ってる間にも天気のチェック終了。

うむ晴れた。

って・・・干すトコがないかな？

いや乾燥機も着いてたから大丈夫っちゃ大丈夫なんだが。

折角晴れだと言うのに・・・。

コレはマジでベランダの設置も考えにやイカンな。

布団とかも干してえーし。

まあ今日のトコはしゃーないんで乾燥機で妥協しよう。

じゃ次は・・・。

・ ・ ・ ・

と、なんやかんや、やってる間に洗濯も乾燥まで終わったんでキツチリ畳んみ。

サクッとガ克蘭に着替えて朝メシへ……。

って、そっぴやIS学園の制服、今日辺り来るんかねえ？

つか来ても着ないような気がするけど。

絶対似合わんしアレ。

まっガ克蘭はもはやトレードマークの一つだしガ克蘭で通そうと思います。

通せる限りは。

っと……それは今はいいとして。

やっぱり食堂的な場所はありません。

うむうむ予想通りだね。

つか……寮歩ってる時もそうだったけど、やっぱり見られてんなあ。

んな珍しいモンでも……

いや珍しいか？

特にココ（IS学園）ん場合は。

まっいいさね、メシメシ！！

おっと、あそこにおわすは昨日の昼に引き続きセシリアさんじゃねえーですか。

朝メシを受け取りセシリアさんの隣へGO！！

「おはようさん！！」

「またですの・・・警戒して今日は少し早めに朝食に來ましたのに」

またですよい。

つかセシリア警戒ってオマエ・・・。

いやさ、それも重要だが・・・。

「お・は・よ・う!~!」

強めにアイサツ。

「うっ……お、おはようございます」

「はいよく出来ましたアイサツはキツチリしましょう」

「……ますますよくわからない人ですわ」

謎多き漢だからね。

わかりやすいとも言われるけど。

っと……メシが冷めて……ってコレ昨日の昼にも似たような
コト言っ たような……。

まあいいさね、メシメシ!!

「いただきます!!」

朝メシもっさもっさ。

あ、ちなみにメニューは朝食セット（和）です。

セシリアはパンのようだがマサさんは朝はご飯が良いのです。

「今日で二日目だなあ？ 今日辺りIS使った実習とかあったりするのかねえ？」

「今日はありませんわよ、それと二日目なのはマサナリさんだけですわ」

IS着ぐるみ改めマサナリシングーSの出番はもうちょい先のよう
だ。

「じゃあさ普通に体育とかねえーの？」

ココ重要。

もし体育とかの代わりにISの実習とかだったら結構キツイ。

体育座りのな意味で。

いや別に体育座りはせんでいい言われてっけど。

「確か・・・今日はありましたわ、というか次の日の授業くらい前の日に調べておくべきですわよ」

「時間割貰ってねえーんだわ、まあ仮に貰っても調べないコトの方が多いけど」

教科書君達には常に机の中にスタンバってもらってます。

コッチのはまだ貰ってねえーけど。

「ふ、不真面目ですわっ!!」

「おいおいセシリア君や、俺が真面目に見えんのかい？」

「見えませんわよっ!!」

「ならば君の目は正常だ、やったねっ!!」

真面目に見えてたら眼科に行けと言うトコだったわ。

「やったね、じゃありませんわ、それにそいつ問題でもありませんわよっ！..!」

「まあまあ朝っぱらか興奮なさらずに、仮にも紳士淑女の国の出だろっに?。」

「誰のせいですのっ!..!」

「強いて言うなら俺」

「強いてもなにもアナタのせいですわよっ!..!」

「わかってるなら聞くなよ、照れるべさ」

『プルプルプル・・・』

あ、小刻みに震えだした。

どうしたのかしら?

いやホントはわかってるけどね。

うん、そうだね。

「な、なんなんですよー、この人はー！ー！」

怒りでした。

うむ、今日もセシリアさんは元気そうだな。

そんな元気なセシリアのシャウトでIS学園での二日目は始まり
ましたとき。

第三話だと思う！（後書き）

後書き

千冬さんが残念な感じの人になりつつある二話目でした。

ではまた次回につ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0213y/>

ISじゃなくね？

2011年11月15日18時13分発行